戦争時におけるアメリカの市民宗教と大統領の関係

射場　実

American Presidents and the American Civil Religion

Abstract

This paper examines the connection between U.S. presidents and civil religion in America. Numerous American presidents have used religious terminology in their public speeches to religion to bring American people together. The author attempts to show how American presidents have sought to unite American people by using the American civil religion, especially in wartime.

Chapter 1 explores the relationship between American civil religion and two U.S. presidents, Thomas Woodrow Wilson and Franklin Delano Roosevelt. Wilson was a pious Presbyterian. The Presbyterian Church believes that mankind act as a proxy for God. Wilson believed that working diligently and living a moral life are mankind's duties, assigned by God. He also believed that God will bless mankind if they carry out those duties. This was a major emphasis of his government. The author discovered that he referred to entering World War I (WW I) as the will of God. This paper also shows that Wilson justified entering WW I by using those ideologies in his public speeches. Roosevelt, on the other hand, widely accepted different religions. In his government, he defined American civil religion as based on "loving of your neighbors", "a spirit of service" and "the religious tolerant attitude". The author discovered that he referred to World War II (WW II) as a the war between the democracy and a godless autocratic regime, in other words "piety versus impiety". This paper also shows that Roosevelt united the American people and convinced them to enter WW II by using these words in his public speeches.

In Chapter 2 and 3, this paper explores the relationship between the American civil religion and the public speeches of George Walker Bush, who was the 43rd president of the U.S. and started the country's latest war. Chapter 2 surveys his religious thought with reference to his autobiographies. In the past, Bush was not a pious believer in Christianity. But one encounter changed him. Bush met Billy Graham, who was a Christian gospel missionary, and was taught the Christian faith by him. In addition to that, he decided to join a Bible study meeting, encouraged by his friends. He read the Bible every day and prayed to understand the Christian faith deeply. And he gradually had become aware of the existence of God and been able to have confidence in his own life. Finally he became a true conservative evangelical Protestant, because of being born again through a success in abstention from alcohol. The author discovered that this experience helped allow him to become a U.S. president.

In Chapter 3, the author analyzed two of his speeches to confirm how he used the American civil religion to emphasize the need for war against terrorism. On September 20, 2001, he made a speech not only members of the U.S. Congress but also all to the American people and people all over the world. In this speech, he insisted that terrorists, who attacked America on September 11, 2001, were enemies of freedom. And he also insisted that America should fight against them to protect American values, freedom and democracy. He explained the importance of pray and urged people to pray together. On January 29, 2002, he made the State of the union Address. In this speech, he insisted that attacks to terrorists and invasion operations to Afghanistan were linked to keeping freedom and justice. In addition, he repeatedly said that those attacks were right. He also explained the importance of a spirit of service and considered that this spirit helped in the fight against evil. By analyzing Bush's two public speeches, the author found that he used words which were related to American civil religion to justify attacks and to encourage American people. And the author also discovered that Bush was supported by a lot of American people because of these two speeches.

The study concludes that successive U.S. presidents have used American civil religion that is related to their religious belief in their public speeches. By using civil religion, U.S. presidents have insisted that their country was selected by God and fighting evil to maintain freedom and democracy is an American's responsibility and right. As a result, people have been encouraged by presidents' speeches and given their support and attention during wartime.

序章

多くの人が知っている通り、アメリカ合衆国は憲法において政教分離が明確にうたわれている。憲法修正第一条において、政府はある特定の教会と特別に交わることが禁止されており、また、国民個人は信教の自由が保障されている。これだけを見ると、アメリカの政治はいかなる宗教とも全く関わりを持たない、持ってはいけないのだと考えられがちである。しかし、現実的にはアメリカの政治と宗教を切り離して考えることは不可能である。そのことが一番よくわかる場面は大統領就任演説だ。大統領就任演説において、「神のご加護がありますように」などと何かしらの「神に関する言葉」が述べられることは長年の伝統となっている。また、大統領就任演説だけでなく、日々の大統領の公的な演説においても聖書からの引用が使われることも多くある。政教分離が憲法で定められているにも関わらず、なぜアメリカの指導者である大統領が公的演説において宗教に関する発言ができるのか。

このような疑問を考える上で重要なのがアメリカの市民宗教(civil religion)である。「市民宗教」はルソーが初めて用いた概念であるが、アメリカの市民宗教はカリフォルニア大学の宗教社会学者のロバート・N・ベラーが 1967 年に発表した『アメリカの市民宗教』で取り上げたことから注目を浴びるようになった。ベラーは『アメリカの市民宗教』の中で、「アメリカには教会とならら

んで、そしてそれとは明確に分化されたものとして、精巧な高度に制度化された市民宗教が現実に存在している(p.343-4)」とし、独立宣言やアメリカ建国後最初の数人の大統領の演説から、市民宗教の起源をたどっている。また、アメリカ宗教史が専門の森孝一(1996)はこの「市民宗教」を「見えざる国教」と呼び、アメリカにとっての「見えざる国教」は「きわめてキリスト教に近いものであるが、キリスト教そのものではない。たとえば、大統領は演説で「神」についてしばしば語るが、「イエス・キリスト」について語ることはない(p.38)」と述べている。つまり、アメリカの「市民宗教」「見えざる国教」は、ある特定の宗教や宗派に限定されるものではなく、いかなる宗教・宗派を信仰する人にとっても同時に信仰することのできるものであり、これはごく自然的にアメリカ国民を取り巻いているものである。このことをふまえると、上で述べた疑問は解決されるであろう。アメリカ合衆国大統領は公的な演説において「神に関する言葉」を用いるが、それは「市民宗教」「見えざる国教」における「神」に関する言葉であり、ある特定の宗教や教会に関する発言とはならないのである。以上のことからアメリカは憲法によって政教分離を明言していると同時に、政治と宗教との関わりが強い国であるとわかる。

では、そもそもなぜアメリカ大統領はわざわざ公的な演説において「市民宗教」を用いるのか。政教分離の国においてなぜわざわざ「市民宗教」を用いてまで、宗教的な演説を行うのか。アメリカ大統領は「市民宗教」をどんな目的で用いるのか。

この問題に対して、1998 年に *Civil Religion & The Presidency* （邦訳『アメリカの市民宗教と大統領』）という著書でリチャード・V・ピラードとロバート・D・リンダーは、ジョージ・ワシントン大統領からビル･クリントン大統領まで 10 人の大統領と市民宗教の関係を明らかにするため、それぞれの大統領の宗教観や演説を分析している。そして最終的に、アメリカの市民宗教は歴史の中で複雑に発展してきたものであり、大統領はその発展の中心的役割を担ってきたという関係性を明らかにした。しかしここでは、ビル・クリントン大統領以降のジョージ・W・ブッシュ大統領とバラク・オバマ大統領については記述されていない。その中でも特に、イラク戦争を開始したジョージ・W・ブッシュ大統領は重要である。現在では「大義なき戦争」と評価されているイラク戦争だが、開戦の際は多数の国民の支持を得ていた。国内外共に大きな影響を与える戦争において国民の支持を得るため、大統領は市民宗教をどのように利用したのだろうか。大統領と市民宗教はどのような関係性をもっていたのだろうか。このことを明らかにしていくために、ピラードとリンダーの研究を参考にしてジョージ・W・ブッシュ大統領の演説を分析していく。また、ジョージ・W・ブッシュ大統領の宗教観を知ることも重要であるため、彼のバックグラウンドも見ていく。

第 1 章では、過去のアメリカ大統領が国家・国民の意識を戦争に向かわせるためにどのように市民宗教を利用したのかを明らかにしていく。ここでは『アメリカの市民宗教と大統領』を参考に、第一次世界大戦におけるウッドロー・ウィルソン大統領、第二次世界大戦におけるフランクリン・D・ローズヴェルト大統領と市民宗教の関係を見ていく。

第 2 章では、ジョージ・W・ブッシュ大統領とバックグラウンドから、彼と宗教の関係を明らかにしていく。ブッシュ大統領の宗教観は、彼の政治に何か影響を及ぼしたのだろうか。

第 3 章では、2011 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ発生からイラク戦争開始までの間に行われたジョージ・W・ブッシュ大統領の公的な演説を分析し、アメリカ国民の意識を戦争に向かわせるために彼が演説中どのように市民宗教を利用したのかを明らかにする。

以上のような分析から、この論文ではアメリカ大統領の政治と市民宗教の関係、その中でも特に戦争を行う際に国家・国民をまとめるためアメリカ大統領はどのように市民宗教を利用したのかを明らかにしていく。

第１章　アメリカ大統領と戦争

アメリカ大統領は国家・国民を戦争に向かわせるために、どのように市民宗教を利用してきたのだろうか。この章では、主に第一次世界大戦におけるウッドロー・ウィルソン大統領と、第二次世界大戦におけるフランクリン・D・ローズヴェルト大統領の 2 つの時代に焦点を当て、大統領と市民宗教の関係を見ていく。

第１節　第一次世界大戦とウッドロー・ウィルソン

第１項　ウッドロー・ウィルソン

1913 年から 1921 年まで第 28 代アメリカ合衆国大統領を務め、第一次世界大戦参戦へアメリカを導いていったウッドロー・ウィルソンはどのような人物であったのだろうか。トマス・ウッドロー・ウィルソンは、1856 年バージニア州スタントンに誕生した。彼はスコットランド長老派信徒の家系に生まれ、母方の祖父は先祖代々聖職者の家系、父も牧師で南部長老派教会の設立者の一人で、時には長老派の 2 つの神学校で教師をしていた。このような家系のため、幼いころから宗教が身近に存在し日々の礼拝や聖書の朗読、父からの説教という宗教教育を受けていた。彼の父親は、息子に聖職者の道を進んでほしいと考え教会と関係のあるノースカロライナ州ダビッドソン大学に入学させたが、ウィルソン自身は教会の職よりも政治職に興味を持っていたため二学期後ダビッドソン大学を退学、ニュージャージー大学に転校した。1976 年に大学を卒業した後は、バージニア大学法律大学院に進学。1882 年にはジョージア州の弁護士資格を所得し、アトランタで弁護士として働いたが興味をすぐに失い、次は教師になるため 1883 年にジョンズホプキンズ大学大学院に入学、1886 年に哲学博士号を所得した。歴史学教授になった彼は、主に法律と政治、行政の相互関係に興味を持ち、多くの著書と論文を出版した。その後プリンストン大学の学長に選任され、初めの数年間はカリキュラム改革や大学財政の健全化に成功するなど大きな成果を上げていた。しかし後半には理事会との権力闘争に苦しみ、それにつれて彼は公職に就きたいと思うようになる。著作や大学での働きにより全国的に名前が知られていた彼は、ニュージャージー州の民主党の実力者に推薦され、1910 年の知事選挙に出馬し、1911 年からニュージャージー州知事となる。州知事としてまずまずの成果を上げ支持を集めた彼は、1912 年に大統領候補に指名され、当時現職のウィリアム・ハワード・タフト大統領とセオドア・ローズヴェルト元大統領と対決した。僅差で勝利し 1913 年にアメリカ合衆国大統領となった彼は、1919 年に重度の脳卒中に襲われるも 1921 年まで大統領職を 2 期全うし、1924 年 2 月 3 日ワシントンの自宅で死去した。

では、彼は具体的にどのような宗教観を持っていたのだろうか。ウィルソンの両親は、キリス

ト教は親が子どもに無理に言って聞かせるものではなく感化させるものであるとの考えを持っており、ウィルソン自身も実際に家庭で宗教を学び長老派の信仰を得た。長老派の考えでは、人間は神の代理人で、神の意志と法、そして人生の指針とされる聖書に従って活動すべきであり、勤勉という神への義務を果たすことで神の恩恵が得られるとされている。ウィルソンも敬虔な信者としてこの教えを信じ、神の法に則って努力を尽くせば神の祝福を受けることができると自信を持っていた(Pierard and Linder 1998=2003, p.179)。

彼にとって、宗教において最も重要なことは奉仕であった。例えば、彼は多くの演説で奉仕について触れ、本当のキリスト教徒は常に他者を助けることを考えながら生活する人であり、教会は個人に対してだけでなく社会に奉仕するためにも存在していると考えていた。また、彼は倫理的で道徳的なものに宗教的関心をおいており、物事を道徳的に正しいか否かで判断する傾向があった。彼は道徳的に正しい人間が正義であるとし、人々の義務は日々道徳的に正しく生活を送ることにあると考えていた(Pierard and Linder 1998=2003, p.184-7)。

第２項　ウィルソンの政治と第一次世界大戦

これまで見てきたように、ウィルソンは奉仕を重要視し、人は道徳的に正しく勤勉に生きるべきであり、その義務を果たすと神の祝福が受けられるという宗教観を持っていた。では、実際に彼は政治・政策、そして第一次世界大戦において、宗教（アメリカの市民宗教）の考えをどのように利用したのだろうか。

彼が政治において利用した宗教の考えは、「神から与えられた義務を果たすこと」である。これは外交問題において特に顕著に見ることができる。ピラードとリンダーの研究によれば、ウィルソン自身やウィリアム・ジェニングス・ブライアン国務長官は「政略よりも不易の真理に基づいて外交政策を考える道徳主義者(p.175)」である。ウィルソンは道徳的なアメリカの優位性を信じ、アメリカの先導をもってすれば世界の国々から戦争が無くなり、神の意志でもある人々が平和に生活する秩序ある世界を作ることができると信じていた。すなわち、彼は世界の国々に民主主義とキリスト教の考えを広めることによって、神から与えられた義務である国際平和の促進を果たすことができると考えていたのである(Pierard and Linder 1998=2003, p.175-7,188)。

ウィルソンは第一次世界大戦への参戦を決定した際にもこの考えを演説内で用いた。彼は 1917 年 4 月 2 日に議会で行った「戦争演説」において、アメリカは神の意志である世界の平和と民主主義を守るために参戦するとし、参戦を正当なものであると主張した(Pierard and Linder 1998=2003, p.190-1)。

以上のようにウッドロー・ウィルソン大統領は、アメリカは神から果たすべき使命・義務を与えられているとし、この使命の下に国民を団結させようとした。そして実際に第一次世界大戦参戦時には、市民宗教に訴えかけた演説を行い参戦の正当さを述べ戦争へと向かっていったのである。

第２節　第二次世界大戦とフランクリン・Ｄ・ローズヴェルト

第１項　フランクリン・Ｄ・ローズヴェルト

では、第二次世界大戦への参戦を導いた大統領、フランクリン・D・ローズヴェルトはどのような宗教観をもち、どのような演説を行ったのだろうか。まずは、彼の人生をふり返ってみよう。ローズヴェルトは、アメリカ合衆国第 32 代大統領として 1933 年から 1945 年まで、アメリカ史上唯一 12 年間在任した大統領である。彼は 1882 年に誕生し、裕福な家庭で不自由なく幸せな環境で子ども時代を送ってきた。14 歳のときにマサチューセッツ州の寄宿学校グロートン校に進学したが、それまでは家庭教師により教育を受けていた。1900 年にはハーバード大学に入学。彼は特に人気があったわけでもない普通の学生であり、むしろ根っから持ちあわせていた社交性や、誰にでも好かれようとする性格のために、彼に対して反感を持っていた人間もいたようだ。彼はこの時期に政治に対して特に大きな関心を示すようになり、アメリカの政治史と政治学で優秀な成績をおさめた。これは 1901 年にいとこのセオドア・ローズヴェルトが突然大統領になったことが少なからず影響していると考えられる。ハーバード大学で政治史と政治学の学位を取ったあとはコロンビア大学で法学を学び、ニューヨークの法律事務所に入る。その後 1910 年から民主党員として政界に入り、1928 年にはニューヨーク州知事に選出。そして 1933 年にアメリカ合衆国の大統領となり、12 年にもわたりアメリカの行政を牽引し、大統領在任中の 1945 年 4 月 12 日に脳卒中によりこの世を去った。

それでは、ローズヴェルトの宗教観はどのようなものだったのだろうか。彼が人生の中で宗教的に特に大きな影響を受けた時期は、グロートン校に進学したときだろう。イギリス的傾向が強く、キリスト教の倫理の教育に非常に重きをおいていたグロートン校でローズヴェルトは青春時代の数年間を過ごし、また、そこで出会ったエンディコット・ピーボディ校長から大きな影響を受けた。グロートン校の校長であり聖公界の教区牧師でもあったピーボディは、宗教に対する私的探求にはほとんど興味はなく、素朴、純朴な宗教観を持っていた。彼は公共に対する奉仕を重要視し、神への奉仕、国家や人類、貧しい人や恵まれない人への奉仕と信仰心とを結びつけた素朴な宗教観を生徒たちに教えた(Gunther 1968, p.224)。

ローズヴェルトもピーボディから教育を受けた生徒たちの中の一人であり、ローズヴェルトが彼から学んだ宗教的信仰における素朴さは、彼が大統領として在任している間も見られた。礼拝へは常に出席していたというわけではなかったし、彼にとって信仰は私的なものであり、そのことについて家族や親しい人と話すことさえほとんどなかったとも言われている(Pierard and Linder 1998=2003, p.207)。

このように宗教に対して素朴な接し方をしていた点をみると、彼が単に信仰心の薄い人間であるかのように思われるが、重要な公式行事がある場合や危機的な状況に直面した場合は、特別な礼拝を行うようにしていた。この点を見ると、宗教は彼にとって力の拠り所であり、決して神に対する信仰心が薄いというわけではないとわかる。

また、彼の宗教観における特徴として、全ての宗教に対する寛容さも挙げられる。彼は、グロートン校のピーボディ校長と同じように、宗教や信仰そのものの中身に対する関心はほとんど無かった。特定の宗教にこだわらないという彼の性格は、宗旨に関係なく候補者を支持し、顧問や補佐官を選んでいることからもうかがえる。1937 年には、アメリカ大統領就任式で当時初めてカトリックとプロテスタント両方の聖職者に祈祷をさせた。彼にとって重要だったことは、それぞれの宗教の宗旨がどうであるかなどではなく、純粋に神の存在を信じ、そして信仰することであった。彼は、神の下なるアメリカで信仰する自由を持つすべての国民の人権を守りたいと思って

いた(Pierard and Linder 1998=2003, p.211)。

第 2 項　ローズヴェルトの政治と第二次世界大戦

これまで見てきたように、ローズヴェルトは宗教や信仰そのものの中身に対してはほぼ無関心であり、それよりも純粋に神を信じ、信仰することを重要とする素朴な宗教観を持っていた。では、実際に政治・政策、特に第二次世界大戦という平時よりもさらに国家・国民を一致団結させなければならない状況下において、彼はこの市民宗教をどのように利用したのだろうか。

彼が政権下において重要とした市民宗教の考えは主に 2 つある。まず 1 つ目はウィルソンと同様に「奉仕」の考え。そして 2 つ目は「あらゆる宗教を受け入れること」である。

ローズヴェルトが「奉仕」を大切にしていたのは、本章第 1 節でも述べたように恩師であるピーボディ校長の影響を受けてのことであろう。ローズヴェルトは、1933 年のカトリック・チャリティーズ全米大会において、民主主義国家と隣人愛の関係について述べている。人間は一人では決して生きられず、民主主義国家は隣人愛無くしては成り立たない。民主主義を実現させるためには、政府省庁の働きだけでなく、教会の慈善事業も不可欠な要素である。教会は人々に精神の強さを与え、教会が教える隣人愛や奉仕は人々を団結させる。国民が団結し挫けず神を信じる限り、国家は困難を乗り越えることができるというのがローズヴェルトの考えであった。

「あらゆる宗教を受け入れる」というローズヴェルトの姿勢は、国家を襲う大恐慌、そして世界大戦という不安定な状況に対して国民・国家を団結させる市民宗教の確立に重要な役割を果たした。移民国家であるアメリカでは、様々なアイデンティティを持つ人々によって国家が構成されており、そのため国民が信仰している宗教や宗派も様々である。そんな中で国民たちをまとめていくために利用されたのが市民宗教であり、この時代に国家主導者であるローズヴェルトが宗教的寛容を説いたことで、アメリカの市民宗教は宗教間の協調関係を基礎とするものとなった。このように宗教を信仰するあらゆる人を内包する市民宗教は、大恐慌に直面しても克服する力の源となった。そしてこの市民宗教は、当時増大してきた独裁政治の恐怖に対して国家を団結させることにも役立った。

1936 年の「人類同胞の日」の演説において、民主主義が独裁政権により脅威を受けているとローズヴェルトは述べた。彼はその独裁政権を「神不在の」政権であるとし、そこでの宗教における問題はキリスト教対ユダヤ教ではないとした。そこにある問題は、特定の宗教を信仰するかしないかではなく、「信仰対不信仰」であるとした。そしてそれに立ち向かうためには、教義の違いを越えて団結することが必要だと説いた(Pierard and Linder 1998=2003, p.215)。このように、ローズヴェルトは第二次世界大戦が近づくにつれ、演説において市民宗教を用い、国民たちをまとめ、戦争への協力体制を固めていったのである。

また、アメリカが真珠湾攻撃を受け第二次世界大戦に参戦することになってからも、彼は市民宗教を「神についての言葉」と結びつけて演説に用い、国民を団結させることに役立てた。その例のひとつとして真珠湾攻撃から約 1 ヶ月後の一般教書演説が挙げられる。そこでは、アメリカは、独裁政権と圧政を押し進める残虐非道な敵国に対して、すべての人は神の前に平等であるという理念を守るために戦っているのであり、これは正義と悪の戦いであると述べた(Pierard and Linder 1998=2003, p.219-220)。このような「すべての人は神の前に平等であるという理念を守

るため」や「正義対悪」という言葉を用いることで、神に対する不屈の信仰心と自分たちの正しさを国民たちに語り、神に祈ることで国民たちを奮い立たせた。

以上のように、フランクリン・D・ローズヴェルト大統領は大統領就任中、奉仕の考えとあらゆる宗教を受け入れる宗教的寛容さをアメリカの市民宗教に組み込んだ。そして国家が大恐慌や第二次世界大戦という危機に直面した際には、奉仕により国民が団結することで国家は困難に立ち向かい乗り越えることができ、どんな宗教を信仰している者であっても神を信仰している者は仲間であり正義であるという市民宗教を演説中に用いることで人々に希望を与え、困難に立ち向かうように奮い立たせたのである。

第２章　ジョージ・W・ブッシュのバックグラウンド

第 1 章では、これまでのアメリカ合衆国大統領、特にウッドロー・ウィルソン大統領とフランクリン・D・ローズヴェルト大統領に焦点を当てて、彼らの宗教観および彼らの政治と市民宗教の関係を見てきた。ウィルソン大統領は奉仕を重要視し、道徳的で勤勉に生きる義務を果たすことで神から祝福を受けることができるという宗教観を持ち、第一次世界大戦参戦に際しては国民を神からの使命と義務の下に団結させるために市民宗教を用いたことを確認した。またローズヴェルト大統領は純粋に神を信じ信仰することに重きを置く素朴な宗教観を持ち、大恐慌や第二次世界大戦という困難に対して国民に勇気を与え奮い立たせるため、奉仕の考えと宗教的寛容さというアメリカの市民宗教の考えを演説中に用いたことが明らかになった。

では、アメリカが行った戦争の中で最も新しいイラク戦争を開始したジョージ・W・ブッシュ大統領も、第 1 章で見た大統領たちと同様に市民宗教を政治や戦争に利用してきたのだろうか。ここからは、この論文の目的として挙げたジョージ・W・ブッシュ大統領と市民宗教の関係を明らかにしていく。ブッシュ大統領については、リチャード・V・ピラードとロバート・D・リンダーの『アメリカの市民宗教と大統領』では言及されていない。そこでまず第 1 節では、ジョージ・W・ブッシュ大統領の人生、そしてそこから彼の人物像を見ていく。続く第２節では、彼自身が 2011 年に書いた回顧録『決断のとき』や、その他の文献をもとに、彼と宗教の関係を見ていく。

第１節　ジョージ・W・ブッシュの人生

まず現在までの彼の人生を、大まかにふり返ってみる。ジョージ・ウォーカー・ブッシュは、1946 年 7 月 6 日コネチカット州ニューヘブンに誕生した。後に一家で移り住んだテキサス州ヒューストンのキンケードという私立学校で学び、高校はマサチューセッツ州アンドーバーにあるフィリップス・アカデミーに入学する。大学はイェール大学に入学。卒業後はテキサス州空軍のパイロットを務めながらも、農業関連産業や上院議員選に出馬する候補者の選挙運動を行った。いくつかの職を経験した後、ハーバード大学のビジネススクールに入学。1975 年に修了後は、当時急成長中だったエネルギー産業のビジネスを始めようとテキサス州ミッドランドへ移り住み、自

身で小さなエネルギー探鉱会社を立ち上げた。その後、連邦下院議員選に出馬するも落選を経験し、1994 年テキサス州知事に当選、その 4 年後の州知事選も再選する。そして 2000 年、大統領選に出馬。民主党候補のアルバート・ゴア氏と接戦の末勝利し、2001 年 1 月 20 日にジョージ・W・ブッシュは第 43 代アメリカ合衆国大統領となった。その後 2 期、8 年間大統領職を務め、2009 年大統領を退任した。

では、彼はどのような人物であったのだろうか。ここでは「一族」と「酒」という 2 点に焦点を当てて見ていくことにする。

まず 1 点目の「一族」。この言葉は彼の人生に大きな影響を与えてきた。ブッシュ一族は長年にわたって政治と関わりを持つ名門であった。彼の祖父は連邦上院議員を務めたプレスコット・ブッシュであり、父親は第 41 代アメリカ合衆国大統領を務めたジョージ・ハーバート・ウォーカー・ブッシュ。そして母親は第 14 代アメリカ合衆国大統領のフランクリン・ピアーズの子孫である。このように名門の一族に生まれたため、進路はほとんど定められていたようなものだった。高校時代は、当時住んでいたテキサス州の高校ではなく、わざわざマサチューセッツ州の高校に入学することになる。これは、フィリップス・アカデミーが彼の祖父と父の出身校であり、一族の伝統としてそこへ進学することになっていたからだった。またその後のイェール大学への進学も、そこが祖父や父、そして親族の多くが卒業している大学であったからだった(Bush 2010=2011, p.28-30)。

そんな生活であっても、彼は一族を嫌悪することはなかった。むしろ祖父母や両親との関係は良好で、存分に愛情を受けて生活していた。2011 年の彼の回顧録『決断のとき』には、幼い頃の祖父母との楽しかった想い出が書かれている。また、両親に対しても「成長するにつれて、両親の愛が限りなく深いことを知った。……その愛に応えて両親を愛した(p.22-23)」と書いている。後に彼に双子の娘が生まれたときも、「娘たちにすばらしい女性の名前を帯びてほしいと思ったので、夫婦それぞれの母親にちなんで命名した(p.54)」ことからも、彼の家族に対する愛がうかがえる。

このように家族を愛していた彼にとっても、一族がコンプレックスになった場面が 1 つだけあった。それは学業の面においてだった。一族の伝統だとしてフィリップス・アカデミーに進学したときも、学業の面でついていくことが大変だったようだ。実際に彼は『決断のとき』のなかで「アンドーバーへ行ったのは、その四〇年後の大統領選挙なみに苦しい経験だった。ほかの生徒よりも学力が劣っていたので、必死で勉強しなければならなかった(p.29)」と言っている。また、大学進学後も回顧録のなかで「大学での私の基本方針は、……一生懸命学び、一生懸命遊ぶ。前者は堅持、後者では群を抜いた(p.31)」と言っているように、どちらかというと学業よりも遊ぶほうが好きだったようだ。第二次世界大戦後歴代のアメリカ大統領の経歴をまとめた『戦後アメリカ大統領事典』の著者である藤本一美(2009)は「ブッシュの大学生活は、勉学よりもパーティーを楽しむことに忙しく、成績は振るわなかった(p.365)」としている。また、藤本(2009)は彼の大学時代について、「ブッシュはエリートの家風の中でコンプレックスに悩み、酒に逃避する傾向がすでに見られた(p.365)」ともしている。彼の後の人生にも影響を与えることとなる「酒」との関係は大学時代から始まったのだ。

彼の人生において大きな影響を与えたものの 2 つ目である「酒」。大学時代から酒を飲んで騒ぐことが好きだったようで、大学最終学年のときに観戦していたフットボールの試合でイェール大

学が勝利した際、相当酔っぱらっていた彼は浮かれた勢いでゴールポストを壊したことがあると、自身の回顧録で語っている。大学を卒業しても彼と酒の関係は断ち切れず、むしろ悪化していくばかりだった。エネルギー産業の会社を立ち上げたものの、後に石油価格の下落によって会社が経営困難となり、そのことが彼を余計に酒に溺れさせることとなった。1976 年には飲酒運転で逮捕もされた。彼は回顧録で当時の自分自身について、確かに飲みすぎでありそれによって問題も起こしていたが、アルコール中毒などではなく単に習慣になりやすい性格なだけだとしている(Bush 2010=2011, p.61)。

このように、ブッシュは酒浸りの日々を送り、彼自身も後に後悔するような失態を何度か起こしてきた。しかし、ある日彼は禁酒を決意し実行する決心をする。その決心をさせたものは、宗教だった。

第 2 節　ジョージ・W・ブッシュと宗教

ブッシュは他のキリスト教信者たちと同様に洗礼を受け、幼い頃には両親に連れられて近くの教会へ通っていた。彼の一族の宗派はプロテスタント系プレスビテリアンだったが、結婚の際、妻が属する保守的なエバンジェリカル(福音派)のプロテスタント系合同メソジスト教会に転じることとなった。しかし、その当時はまだ教会活動に熱心ではなく、彼自身、回顧録の中で「宗教はいつも私の人生の一部を占めていたが、信者といえるほどではなかった(p.55)」、「宗教はどちらかといえばしきたりであって、神聖な経験ではなかった(p.56)」とふり返っている。

しかしそんな彼を変えたのは、福音派の宣教師ビリー・グラハムとの出会いだった。1985 年、例年のように家族を連れて実家に帰ったブッシュは、父と母が招いていたグラハムに出会う。ブッシュはそこでまず、グラハム自身に惹かれた。「私はグラハムにすっかり心を奪われた。グラハムには強力な存在感があり、思いやりと慈愛に満ち、鋭敏な頭脳がそなわっている(p.57)」と回顧録で語っている。

この出会いをきっかけとし、ブッシュは変化していく。道徳的によりよい人間になるためには聖書を読むのがよいと考えていた彼は、グラハムからキリスト教信仰について説明を受けることで理解を深めていった。グラハムに出会ったあと、ブッシュは友人のドン・エバンズとドン・ジョーンズに誘われ、共に聖書研究会に参加しはじめる。そこでは毎週新約聖書の章をひとつずつ勉強し、2 年間真面目に聖書を読んだ。彼はドン・エバンズにもらった『デイリーバイブル』を毎朝読み、祈り、キリスト教の教義をより明確に理解しようとしながら信仰を深めていった。その結果、グラハムに出会った当初は神の存在自体に懐疑的だった彼が、次第に神の存在を感じるようになり、自分の人生に自信をもつことができるようになった(Bush 2010=2011, p.58-9)。

そしてついに彼の人生が大きく変わるときが来る。1986 年、40 歳になったとき、彼は改心して禁酒を決断する。それ以降、回顧録が執筆されている 2010 年時点までは一滴もアルコールを飲んでいないという。彼は回顧録において、禁酒していなかった場合の人生を想像して「元テキサス州知事・元アメリカ合衆国大統領としてこうした思いを書き綴ってはいないはずだ(p.61)」と言っている。このように禁酒を決意し、継続できたのは信仰のおかげであり、また、禁酒したことで信仰がより強くなったと彼は言う(Bush 2010=2011, p.61)。

彼が経験したような「再生体験(born again)」を持つことは、エバンジェリカルの特徴である。

そしてこの再生体験は藤本(2009)によると、彼にとって「共和党保守派の中核となるキリスト教右派との結びつきをもたらし、将来の大統領への道を作ることになった(p.367)」のだという。つまり、彼は 40 歳に「再生体験」をしたことで真の保守的な福音派プロテスタントとして生まれかわり、大統領になることができたのである。

以上のように、ジョージ・W・ブッシュは家族に愛され、彼自身家族を愛しながら成長していった。それと同時にエリートの一族に生まれたことにコンプレックスを抱き悩み、そこに事業の失敗も相まって毎日酒を飲む生活を送るようになった。しかし、グラハムとの出会いからキリスト教信仰を深め、禁酒に成功。「再生体験」を実際に体験した。これは彼が真の保守的福音派プロテスタントになったということであり、彼はそれにより共和党保守派の中心となっているキリスト教右派からの支持を受け、後に大統領に選ばれることとなる。

では大統領就任後、彼の政治に宗教がどのような影響を与えたのだろうか。そして、彼自身はどのように政治に宗教を用いていったのだろうか。

第 3 章　ジョージ・W・ブッシュと市民宗教

第 2 章では、ジョージ・W・ブッシュ大統領の大統領退任までの人生と、彼の人物像、そして彼の宗教観を見てきた。では、実際彼は政治において宗教をどのように利用したのだろうか。この章では 2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ発生からイラク戦争開始に際して、国家・国民たちの意識を戦争に向かわせるため、ジョージ・W・ブッシュも歴代のアメリカ合衆国大統領たちと同じように市民宗教を利用したのかを彼の演説から明らかにしていく。まず第 1 節でアメリカ同時多発テロ発生直後の 2001 年 9 月 20 日にアメリカ連邦議会で彼がおこなった演説を、そして第 2 節では、2002 年 1 月 29 日に行われた一般教書演説を見ていく。なお、この 2 つの演説を分析対象に選んだ理由として、2001 年 9 月 20 日の演説はアメリカ同時多発テロの発生後最初に行われた公の演説であること、また 2002 年 1 月 29 日の演説はアメリカ同時多発テロ後初の一般教書演説であることが挙げられる。

これら 2 つの演説を分析していくにあたって、長岡技術科学大学語学センターの村上直久が 2004 年に書いた『ブッシュ米大統領の 2004 年一般教書演説のディスコース分析』の中で用いられている分析方法を一部手本にしていく。村上は、ブッシュ大統領によって行われた 2004 年までの 4 回の一般教書演説のいずれにも攻撃的なレトリックがいくつか使われているとし、上記の論文では批判的ディスコース分析(critical discourse analysis)や批判的言語学(critical linguistics)の手法を用いながら 2004 年の一般教書演説を分析している(p.159)。具体的には、「①繰り返し、②対比(parallelism)、③人称(persona)の工夫、④テロリストやテロリスト国家に対する敵対的な言語の使用とその裏返しとしての同盟国の称揚(敵か味方か)、⑤イデオロギー的言語(民主主義や自由など)の多用、⑥「神」への頻繁な言及(p.159-60)」に着目し、「レトリック戦略」が用いられているか分析している。この手法の中でも市民宗教に関係するのは⑤と⑥である。

この章では、村上直久の分析の⑤と⑥と共に、リチャード・V・ピラードとロバート・D・リンダーの『アメリカの市民宗教と大統領』を参考にして、ブッシュの演説をもとに彼の政治と市

民宗教の関係を見ていく。

第 1 節　アメリカ連邦議会での演説

2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロから 9 日後、ブッシュ大統領はアメリカ連邦議会で演説を行った。この演説はその場にいた議員にだけでなく、アメリカの全国民、そして全世界に向けて行われた。ここでは主に、同時多発テロ発生後の議員の働きや世界の人々のアメリカに対する祈りと支援に対する感謝、先日のテロ行為の犯人は「アルカイダ」であるという報告、そしてこれからまたアメリカに襲い来るかもしれない脅威から国民を守るために国土安全保障局を創立することが発表されている。

この演説を市民宗教に注目して見ていくと、重要な箇所が 2 点ある。まず 1 点目は、「自由の敵との戦い」という構図だ。アメリカの市民宗教にとって自由という言葉は重要なキーワードである。アメリカの市民宗教の聖典とも言われるアメリカ独立宣言において、アメリカは自由の理念のもと創り上げられる国家であるとされている。また、その自由な社会、民主主義の考えを世界中に広めることが、神に選ばれた民であるアメリカ国民に与えられた神からの使命であると信じられている(Pierard and Linder 1998=2003, p.65-6)。今回の演説では、このようにアメリカの市民宗教にとって重要な自由を脅かす敵に対して、断固として戦うという姿勢を随所に見せている。

> They hate what we see right here in this chamber – a democratically elected government. Their leaders are self-appointed. They hate our freedoms – our freedom of religion, our freedom of speech, our freedom to vote and assemble and disagree with each other.
> (中略)
> I ask you to uphold the values of America, and remember why so many have come here. We are in a fight for our principles, and our first responsibility is to live by them. No one should be singled out for unfair treatment or unkind words because of their ethnic background or religious faith. (Selected Speeches of President George W. Bush 2001－2008)

以上の引用では、democratically や freedom という言葉が使われている。これらに注目すると、ブッシュはこの演説で、アメリカは自国の価値観や自由と民主主義を守るために戦い、それは義務であると主張している。また、9 月 11 日に攻撃を仕掛けてきたテロリストたちは、彼らの過激な考えを世界中に押しつけ世界をつくり直すことを目的としている。彼らは自由を脅かす者であり、アメリカにとっての敵である。そして彼らを支援するすべての政府も同じく敵と見なすと、ブッシュは演説中に何度も述べている。自由や民主主義といったアメリカの価値観は、市民宗教の重要な要素である。そのため、これらを守ることは義務だと主張することで市民宗教に訴えかけて国民を鼓舞させようとしていると解釈できる。また、テロリストたちを自由や民主主義を脅かすものだと表現することで、アメリカの価値観を脅かすものであり敵であると国民の心にわかりやすく訴えかけていると考えることができる。

そして 2 点目は、「祈り」である。

And, finally, please continue praying for the victims of terror and their families, for those in uniform, and for our great country. Prayer has comforted us in sorrow, and will help strengthen us for the journey ahead. (Selected Speeches of President George W. Bush 2001－2008)

この演説の中でブッシュは、捜査員や兵士などテロリズムを排除するために活動する全ての人に対して何度も感謝の言葉を述べ、同時に祈りを捧げている。そして祈りは、悲しむ人々を癒してくれるし、力を与えてくれるものだと呼びかけている。この場合の「祈り」は、必ずしもキリスト教だけに限定されず、どのような宗教を信仰している者であってもアメリカ国民、そしてアメリカのために活動している人たちであれば祈りの対象であるという点で、アメリカの市民宗教の要素をもっているといえる。この点を見ても、ブッシュが市民宗教を用いて人々を勇気づけようとしていると考えることができる。

またこの 2 点以外にも注目すべき点はある。例えば“justice”の多用である。

Whether we bring our enemies to justice, or bring justice to our enemies, justice will be done. (Selected Speeches of President George W. Bush 2001－2008)

これは村上(2004 年)が述べた「レトリック戦略」の中の⑤イデオロギー的言語の多用に当たる。justice を繰り返すことにより、アメリカ合衆国が正義・正しいものであり、アメリカを攻撃する敵は悪であり裁かれるべきものであるという構図を聴いている人々に植え付ける役割をしている。これは第 1 章で見てきたように、アメリカの道徳的優位性を示し、世界を正義対悪という構図で見るウィルソンやローズヴェルトの演説に見られた特徴と似ている。このことを考えると、ブッシュが正義対悪、正義である自分たちアメリカに敵対する者は悪であるという市民宗教の考えを利用して、イラク戦争開始への支持を得ようとしていることがわかる。

第 2 節　一般教書演説

2002 年 1 月 29 日、ブッシュはアメリカ同時多発テロ後初の一般教書演説を行った。一般教書演説は、毎年 1 月に連邦議会の上下両院合同会議で行う演説であり、そこでは主にその年 1 年の政策方針が述べられる。

2002 年の一般教書演説は、北朝鮮やイラク、イランなどを、テロリズムを支援する「悪の枢軸(axis of evil)」と呼んだことでも有名になった。この演説の主な内容は、テロリズムとの戦いの状況報告とこれからの予算案の提案である。ブッシュは、世界のテロリストの逮捕やアフガニスタンのテロリスト訓練基地の破壊、アフガニスタン政権の崩壊と新政権の誕生を受けて、テロリズムに対する戦いに勝利を収めつつあるとしているが、それと同時にテロリズムとの戦いはアフガニスタンだけでは終わらず、これからも戦いは続くと訴えている。そのためアメリカはこれからより国防、戦力増強に力を注ぐべきであるし、また、アメリカを復活させるためには経済の回復

にも力を注いでいくべきであると述べ、これらの分野に多くの予算を割いていくと宣言、国民の理解を求めている。

この演説を市民宗教に着目して見ていくと、重要な点が 3 つある。

まず 1 点目は、前節での演説でも見られた「自由」と「正義」というイデオロギー的言語の多用である。しかし 2001 年 9 月 20 日の演説と比べると、これらの言葉は今回の演説ではより自分たちの行動を正当化するために使用されている。例えば、自由のために戦うことは、アメリカの責務であり名誉だとしたり、自由と正義は正しいという表現を使い、アメリカが行う行動は正しいことであると繰り返し人々に主張している。ブッシュは、このようにイデオロギー的言語を用いることによりアメリカの人々の心に訴えかけ、自分が主導となって指揮している、また指揮しようとしている行動は正しいことであると、テロリズムたちとの戦いとしてのアフガニスタン侵攻を正当化していると考えられる。アメリカの市民宗教において自由や正義を守ることは神がアメリカに与えた義務であるとされることから、ブッシュ大統領はこの演説で市民宗教の考えを利用することで国民の支持を得ようとしていると言えるだろう。

2 点目は、「奉仕の重要さ」である。ブッシュはこの演説で、国内の緊急事態への対応、地域社会の再構築、そしてアメリカ人の慈しみの心を世界に広げることを目的としているＵＳＡ自由部隊(The USA Freedom Corps)について触れ、人々にこの活動への参加を勧めている。

> This time of adversity offers a unique moment of opportunity, a moment we must seize to change our culture. Through the gathering momentum of millions of acts of service and decency and kindness, I know we can overcome evil with greater good. (藤本・濵賀・末次 2007 年, 302 頁に引用)

ここでブッシュはアメリカ同時多発テロを、アメリカ人の慈しみの心を世界に広げるまたとない機会としており、奉仕は邪悪に打ち勝つ手助けをすると述べている。奉仕を重要視する点に注目すると、ここにはキリスト教的な宗教観があると考えられる。また奉仕は、第二次世界大戦時にローズヴェルトが掲げた理念でもある。このことから、奉仕により国民は団結することができ悪を倒すことができるという考えは、ローズヴェルト政権時から継続して重要視される市民宗教の考えのひとつであると考えられる。

3 点目は「神に関する言葉」の使用である。これは村上(2004 年)が述べた「イデオロギー戦略」の⑥「神」への頻繁な言及に当てはまる。今回の演説では、歴代アメリカ大統領の演説でもよく見られる“God bless”「神のご加護がありますように」以外にも、下のように用いられている。

> Beyond all differences of race or creed, we are one country, mourning together and facing danger together. Deep in the American character, there is honor, and it is stronger than cynicism. And many have discovered again that even in tragedy-especially in tragedy---God is near. (藤本・濵賀・末次 2007 年, 303 頁に引用)

ブッシュはここで、苦しいときも神がわれわれを見守ってくださっていると人々を励まし鼓舞するために、アメリカは常に神の下にある国であり、アメリカ人は神に選ばれた民であるという

アメリカの市民宗教の考えを利用していると考えられる。

以上で見てきたとおり、ブッシュは 2 つの演説の中でたびたび、自由と民主主義のために戦うことをアメリカの義務であり神からの使命とし、祈りや奉仕を重要視し国民に要求するというアメリカの市民宗教の考えを用いていた。そしてそれは、テロリスト、またテロリストたちを支持する政権に対する攻撃を正当化させ、アメリカ国民の意識を戦争肯定に向けていくために利用されていた。その結果、2001 年 9 月 20 日の演説後にはブッシュの支持率は 90%まで急上昇し(藤本 2009, p.384)、このことは市民宗教に訴えかけることが国民からの支持を得ることに繋がることの証とすることができる。

終章

本論文では、アメリカ大統領の政治と市民宗教の関係、その中でも特に国内外共に大きな影響を与える戦争を行う際に国家・国民をまとめるためアメリカ大統領はどのように市民宗教を利用したのかを明らかにすることを目的としてきた。大統領が国民に直接的に彼の考えを訴えかけることができる演説に焦点を当て、その分析からアメリカ大統領と市民宗教の関係を考察してきた。

第 1 章では、2003 年に『アメリカの市民宗教と大統領』でリチャード・V・ピラードとロバート・D・リンダーが明らかにした大統領と市民宗教の関係を参考に、過去に世界大戦に参加を決定したウッドロー・ウィルソン大統領とフランクリン・D・ローズヴェルト大統領の政治と市民宗教の関係を明らかにした。ウィルソン大統領は道徳的に正しく生きることが人間の義務とし、その義務を果たすことで神から恩恵を受けることができるという考えを持ち、そしてその宗教観を自身の政治にも持ち込んだ。彼は神から与えられた使命と義務の考えを用いて国民をまとめ上げようとし、また第一次世界大戦時には演説中に市民宗教を用いて参戦の正当さを主張した。ローズヴェルト大統領は奉仕を重要視し、どんな宗教に対しても寛容な考えを持っていた。彼はこの宗教観を市民宗教の流れにうまく取り込み、アメリカが第二次世界大戦という困難にあった際には奉仕によって国民を団結させ、神を信仰している者は正義とすることで人々を奮い立たせた。

第 2 章では、ジョージ・W・ブッシュ大統領の政治と市民宗教の関係を見ていくため、まず彼と宗教の関係性を見てきた。元々は敬虔なキリスト教徒ではなかった彼が、ビリー・グラハムという宣教師に出会ったことで徐々にキリスト教信仰への理解を深めていく。その結果、当時懐疑的だった神の存在を実際に感じるようになり、その信仰心をもって禁酒を決意、継続するという「再生体験」を経験し、保守的な福音派プロテスタントとして生まれかわった。この経験が彼と共和党保守派の中心であるキリスト教右派との結びつきを作り、彼はアメリカ合衆国大統領となることができたことを明らかにした。

第 3 章では、2011 年 9 月 11 日に発生したアメリカ同時多発テロからイラク戦争開戦までの演説で、アメリカ国民の意識を戦争賛成に向かわせるためにどのように市民宗教を用いて演説をしたのかを明らかにするため、同時多発テロ直後にアメリカ連邦議会で行われた演説と、同時多発テロ発生後初の一般教書演説の 2 つの演説を分析してきた。その結果、彼は 2 つの演説で、神に関する言葉の使用や、自由や民主主義を守るというアメリカの使命と義務、そして自分たちは善

でありテロリストたちは悪であるとする考えの主張など、市民宗教を利用してテロリストへの攻撃を正当化し、人々を鼓舞して意識を戦争へ向けようとしたことを明らかにした。

以上の研究を踏まえると、アメリカ合衆国大統領は戦争を行うにあたって、国民を励まし団結させるために、演説で市民宗教を利用してきたと言える。そしてそれはブッシュ大統領でも同じことが言える。彼も国民を鼓舞・団結させるために、そして他国への攻撃理由を正当化して国民の意識を戦争へ向けるために演説中で市民宗教を利用したのである。

最後に、本論文の反省点は、過去の大統領の政治と市民宗教の関係を見ていく際、リチャード・V・ピラードとロバート・D・リンダー『アメリカの市民宗教と大統領』に依存しすぎたことであった。より深く市民宗教と大統領の関係を知るためには、別の研究者の研究も同時に見た方がよかった。

参考文献

Bush, George W. 1999. *A Charge to Keep: My Journey to the White House*. New York: Harper Collins Publishers.

Bush, George W. 2011 年.『決断のとき』上・下(伏見威蕃訳). 日本経済新聞出版社. (原著名：*Decision Points*. New York: Random House, 2010).

米国大使館. 2002 年. 『米議会上下両院合同会議および米国民に向けた大統領演説』(東京：駐日米国大使館, 2002 年). 〈http://japan2.usembassy.gov/j/p/tpj-jp0026.html〉(アクセス日：2014 年 11 月 25 日)

_____. 2001 年. 『ブッシュ大統領による一般教書演説』(東京：駐日米国大使館, 2001 年) 〈http://japan2.usembassy.gov/j/p/tpj-jp0055.html〉(アクセス日：2014 年 11 月 25 日)

Bellah, Robert N. 1973 年. 「アメリカの市民宗教」『社会変革と宗教倫理』(河合秀和訳). 未来社. (原著名：*Civil Religion in America*. San Francisco: Night Shade Books, 1967)

Freud, Sigmund and William C. Bullitt. 1969 年.『ウッドロー・ウィルソン』(岸田秀訳). 紀伊國屋書店. (原書名：*Thomas Woodrow Wilson: A Psychological Study*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1966).

Gunther, John. 1969 年. 『回想のローズヴェルト』(清水俊二訳). 早川書房. (原書名：*Roosevelt in Retrospect*. New York: Harold Ober Associates, 1950).

藤本一美. 2009 年. 『戦後アメリカ大統領事典』. 大空社.

_____・濵賀祐子・末次俊之. 2007 年. 『資料：戦後米国大統領の「一般教書」』第 4 巻 「クリントン、ブッシュ・ジュニア」1993 年～2006 年. 大空社.

Kerrigan, Michael. 2012 年.『図説アメリカ大統領　権力と欲望の 230 年史』(高尾菜つこ訳). 原書房. (原著名：*American Presidents: A Dark History*. London: Amber Books Ltd, 2011).

栗林輝夫. 2009 年. 『アメリカ大統領の信仰と政治――ワシントンからオバマまで』. キリスト新聞社.

黒田寛一. 2007 年. 『ブッシュの戦争』. あかね図書販売.

Laurent, Eric. 2003 年. 『ブッシュの「聖戦」――宗教、ビジネス、闇のネットワーク』(藤野邦夫・山田侑平訳). 中央公論新社. (原著名：*Le Monde Secret De Bush*. Paris: Plon, 2003).

Leuchtenburg, E William. 1968 年. 『ローズヴェルト』(陸井三郎訳). 紀伊國屋書店. (原書名：*Franklin D. Roosevelt and the New Deal 1932-1940*. New York: Harper & Row Publishers, 1963).

森孝一. 1996 年. 『宗教からよむ「アメリカ」』. 講談社.

_____・村田晃嗣編. 2009 年. 『アメリカのグローバル戦略とイスラーム世界』. 明石書店.

Noll, A. Mark. 2010 年.『神と人種 アメリカ政治を動かすもの』(赤木昭夫訳). 岩波書店. (原書名：*God and Race in American Politics: A Short History*. Princeton: Princeton

University Press, 2008).
Pierard, Richard V. and Robert D. Linder. 2003 年. 『アメリカの市民宗教と大統領』(堀内一史・犬飼孝夫・日影尚之訳). 麗澤大学出版会. (原書名：*Civil Religion & The Presidency.* Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1998).
"Selected Speeches of President George W. Bush 2001－2008". <http://georgewbush-whitehouse.archives.gov/infocus/bushrecord/documents/Selected_Speeches_George_W_Bush.pdf> (アクセス日：2015 年 3 月 15 日).
Singer, Peter. 2004 年. 『「正義」の倫理』(中野勝郎訳). 昭和堂. (原書名：*The President of Good and Evil: The Ethics of George W. Bush*. New York: Dutton, 2004).
坪内隆彦. 1997 年. 『キリスト教原理主義のアメリカ』. 亜紀書房.